



Good News for Japan とぎのこえ

アルコール依存症は病気です！

眞鍋 精一



救世軍では、毎年四月に「酒害強調週間」を守っています。今年も四月七日～十三日の間で、酒の害を警告し、救世軍が創業当時から取り組んできたアルコール依存症者を支援する働きを知らせています。

私たちは、自分を、自立した個性をもった自由な存在と考えますが、事実は、誰もが何かに頼らなければ生きていけない、弱く、依存性の強い生き物なのです。アルコールに依存しすぎると、アルコール依存症になる危険があります。

アルコール依存症者は、昔は「アル中」と言われ、社会的な差別や偏見で見られがちで

した。彼らは、酒を飲み過ぎて問題を起す人、意志の弱いだらしない人たちと考えられてきたのです。確かに、アルコール依存症者は、当の本人だけの問題で済みません。人間関係や社会的信用にも大きな支障を生じさせ、自身の健康を失うだけでなく、家族や仕事も失ってしまいます。ドヤ街で一人寂しく死ぬ人がいることも事実です。

しかし、皆さんに知っていただきたいことは、アルコール依存症は病気である、ということなのです。例えば、風邪にかかり、高熱を出してうなつて寝ている人に、「あなたは、意志が弱いから風邪になったのだ」とは言わないでしょう。

正しい治療を受け、投薬や安静によって回復するよう配慮します。それと同じように、アルコール依存症という病気も、すぐに病院に行つて治療を受けられるようにすることが必要なのです。それが先決であり重要です。

アルコール依存症はどんな病気でしょうか？

アルコール依存症は、アルコールのもつ依存性によって発病する病気です。薬物依存の一つです。ひとりで言えば、飲酒によっていろいろな悪い結果が起こっているにもかかわらず、飲み続けてしまう状態です。その症状は、

第一段階、酒にどんどん強くなる。これを、耐性と叫びますが、同じ量のアルコールを飲んで、だんだん酔わなくなつていくことを言います。酔つて気分が良くなるまでのアルコールの量が、増えていきます。

第二段階、コントロール障害が起こります。アルコールの量をコントロールして飲むことができなくなり、コントロール障害になると、一生回復せず、いわゆる正常な酒飲みには戻れません。何十年飲まなくても、一滴のアルコールが体内に入ると、再び飲み始めてしまうのです。健康や家庭生活、仕事などに支障が生じることがわかつていても飲み続けます。これ以上飲むと命が危ないと医者に言われても、飲酒がもとで離婚話が出ていても、今度飲んだら解雇されると言われていても、それでも飲み続けるのが、アルコール依存症です。

第三段階、アルコールが切れると不快な離脱症状―気持ち落ち着かない、手が震えるなど―が出てきます。そこで、その症状を治めるためにまた飲みます。アルコールが体内に入ると離脱症状が治ります。不眠を解消するために飲むことも同じ理由です。この離脱症状が怖くて、酒を断

つことができないう人がいます。離脱症状を治すために飲酒するという悪循環を断ち切らなければなりません。そのためには、完全断酒するほかないのです。

どうしたら回復できるのでしょうか？

回復の第一歩は、病気についての知識を身につけることです。次に、自分はアルコール依存症であると認めることです。そして、飲んでしまう自分自身に自助グループの必要性を認めることです。残念ですが、アルコール依存症は一人で回復することは不可能です。断酒会やAA(アルコールクス・アノニマス)という自助グループの先行く仲間たちが必要です。なぜなら、アルコール依存症は、試行錯誤を繰り返しながら回復に向かつていく病気だからです。(参考資料：森岡洋著「よくわかるアルコール依存症―その正体と治し方」)

救世軍男子社会奉仕センターは、アルコール依存症者支援施設です。ここでは、毎朝、朝礼で聖書からメッセージを聞き、スピリチュアルなケアがなされます。そして、毎

週「人と物との再生」をモットーに掲げるバザー場での働きを通して、その作業工程や空間で心と体の基礎力が培われます。この日々の通所作業の繰り返しによって、飲まない生活を徐々に身につけていくのです。アルコール依存症からの回復を願う方は、ぜひ、ご相談ください。

アルコール依存症という病気が、大変苦勞がありますが、その苦勞をした人にしか得られない境地や気づきというものがあります。

「それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあつても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。」(コリントの信徒への手紙二 12章10節)

自分は弱い存在であり、それゆえ、本当に頼るべきもの―イエス・キリスト―を認めらるなら、キリストによる「再生」がなされます。そのような人に、神は、酒に依存しない人生を歩む道を開いてくださると信じるものです。

(救世軍士官(伝道者))

謹んで震災のお見舞いを申し上げます。
一日も早い被災者の方々の心の平安の回復と、被災地の復興をお祈り申し上げます。

〈信仰の体験談〉

数えきれない神の恵みに 生かされる日々

両手足の障がいを克服し、
信仰によつて与えられた幸せ



上田 秀子

私は昭和十四年七月七日、家具商人の子として中国の山東省済南で生まれました。二歳の頃、氷点下三十度を超える寒さの中で両脚が凍傷となり、四歳の時、膝から下を切断しました。父は終戦の年に病死し、当時二十九歳で夫を亡くした母（奥田順）は引き揚げに当たり、全財産を米三升と引き換えたそうです。

昭和二十年、私が六歳の時、引き揚げ船で長崎にたどり着きました。その時に

は私の両手首が凍傷となり、手首から先が腐っていました。母と、兄、私、弟の四人は、収容所のあった博多から母の実家がある大阪に引き上げてきました。母は収容施設や母子寮を転々としながら三人の子を育てました。しかし、その間、私は、両手とも肘先から失っていました。

母は、両手両足を失った私にも一人前の教育を受けさせようと、雨の日も風の日も背中に背負い、十二歳

になった私を学校に通わせました。教室内でも、つききりで世話をしてくれました。当時、母は

「いくらかわいい我が子のためとはいえ、自分が働いてもせずに生活保護を受けていてよいのだろうか」と、悩んでいたそうです。

そんなある日、新聞に私たちの記事が載りました。「ひたむきな母親の思いやりが実を結んで、秀子さんは両足がひざから下一寸もないのに切断したところ

に靴をあてて歩くほか、御飯も丸くなった両手を使ってハシをとり、このごろではもう毛糸の編み物までできるようになった。」

新聞に載った記事がきっかけとなり、また私が障がい児童作品で知事賞を受けるなどしたこともあって、障がい者を受け入れる学校の体制が整えられていきました。私が二年生の時、手足の不自由な児童が治療しながら勉強のできる、府立整肢学院ができました。その年の八月に同学院内の特設小学校に入学し、義足で歩く訓練をしました。整肢学院で義足が履けるようになり、十五歳で卒業しました。

昭和三十年に更生指導所に入所し、二年の訓練を受け、母の愛とみんなの支援により、希望に満ちて卒業しました。

しかし、十八歳という年頃でもあり、周囲の目が気になり、自分の不幸が心に突き刺さるようになってきました。なぜ母はもっと私を保護してくれなかったのかと母を責めました。同年代の人が着飾り歩いているのを見ては、「私もハイヒールをはいて歩きたい」と両手両足の意味があるのか」と、心が焼けるような思いで一杯悔い改め、イエス・キリス

トを信じました。

信仰をもち、聖霊に満たされて、私は明るくなりました。再び職業訓練所に通うようになり、資生堂で洗濯石鹸の包装をする仕事に就きました。その後、自宅近所のプレス技研工業所に就職し、ネジの選別をし、熟練者に劣らずお給料をもらえるようになりました。

その頃、私は日本メノナイトブレザレン教団平野キリスト教会へ通っていました。後に結婚する故上田正久も、同じ教会の祈禱会に通っていました。彼の自宅が平野区にあつたため、週日は平野キリスト教会へ、日曜日には所属する救世軍天満小隊（教会にあたる）に通っていたのです。

私たちは昭和四十四年十一月二日、天満小隊で結婚式を挙げました。

「手のない手、でつかんだしあわせ」と週刊誌『ヤングレディ』に載り、大きな証しとなりました。

結婚後、週日は主婦として炊事洗濯すべてをおこなひ、日曜日には一日、主人と共に天満小隊で過ごすという生活をしていました。その後、二人の子どもが与



天満小隊で結婚式



果もあり、なんとか車椅子生活を送れるまで回復できました。退院後は車椅子住宅に引っ越し、できない部分は主人がサポートしてくれました。

えられました。息子は大学を卒業後、障がい児施設に従事し、現在は堺市で介護福祉の仕事に就いています。娘は看護師の経験を活かし、現在は治験コーディネーターとして医薬品の開発に従事しています。

平成十四年、私は頸椎性脊髄症を発症し、徐々に手足の痺れや痛みが増してくるようになってい

た。そして、転倒したことがきっかけで手足が全く動かなくなり、救急車で病院に運ばれました。当時は首を動かすことができず、歩けるならば病院の屋上から飛び降りて死にたいと思つたくらいでした。

幸いリハビリの効

果もあり、なんとか車椅子生活を送れるまで回復できました。退院後は車椅子住宅に引っ越し、できない部分は主人がサポートしてくれました。

平成十八年に主人が天に召された後は、しばらく息子と生活を共にしておりました。当直等で息子が夜間不在になることを心配した娘夫婦が、京都で一揃に暮らすと提案してくれました。車椅子で生活できるようにとバリアフリーの家を建ててくれました。

現在は、京都で娘夫婦の家族と住んでいます。娘夫

婦には女の子（七歳）と双子（五歳）の男の子がおり、同居した当時は双子が0歳で、手が足りないからと、私が双子の一人に離乳食を食べさせていました。今では、私が廊下でつまずくのを目にする、

「ひではあちゃん、大丈夫？」

と言つて優しく手を引いてくれるようになりました。かわいい三人の孫たちに囲まれて、賑やかですが幸せな日々を過ごしています。

孫たちが保育園や学校に出かけた後、聖書の通読をしています。去年、再び創世記から読み始め、うとうとしつつもようやくイザヤ書までできました。私にとつて心穏やかに過ごせる大事なひと時です。

娘夫婦の家族はクリスチャンホームで、日本キリスト教団の京都丸太町教会に在籍しています。

私は京都に住むようになってから、天満小隊と京都小隊の両方に通っています。天満小隊までは、家から阪急の最寄駅まで車椅子で十五分、電車で一時間かかります。電車の乗り降りは駅員さんが手伝ってくれます。駅員さんともすつかり顔なじみになりました。日曜日に小隊に通う姿が証



天満小隊の信徒の皆さんと（前列中央）

は、京都小隊で親しくなつたご夫妻と、その息子さんとで沖縄旅行に行ったことです。その息子さんが高齢者や障がい者のための旅行会社を起業されたため、安心して車椅子で旅行に行くことができました。旅行では、初めての飛行機、美しい自然や沖縄の文化に触れることができ、とても楽しい時間を過ごすことができました。

「われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。」（ガラテヤ人への書2章20節）

「わが恩恵なんぢに足れり。」（わたりし神の恵みはあなたに十分である。「コリント人への後の書12章9節」）

これは文語訳聖書の言葉ですが、私の好きな御言葉です。

また、好きな賛美歌は「アメイジング・グレイス」で知られる「おどろくばかりのみめぐみなり」と、救

世軍の賛美歌「こころみの波にもまれ」です。この歌は私の心を歌っています。こころみの波にもまれのぞみ絶ゆとおもうとき主のめぐみのかずかずのなおも多きにおどろかん受けたるめぐみをいちいちかぞえあげ受けたるめぐみをかぞえて主の愛を知れよ

うちに引きこもりよくよしていた私を、神様は救ってくださいました。私が神の独り子イエス様のことをまだ知らない時から、神様は私の生涯を導いてくださいました。罪を悔い改めて、神様の愛の中に生きられるようになりました。生きる希望だけがなく、主人と二人の子ども、そして三人の孫を授けてくださり、現在の幸せな日々を与えてくださいました。

この驚くばかりのたくさんの御恵みを心から感謝いたします。

（救世軍天満小隊【教会】所属）

この部分を封書か葉書に貼り、裏面の救世軍にお送りください。

クリトリ
ご住所

私の近くの救世軍を紹介してください。
キリスト教についてもつと知りたいたいです。
「ときのことえ」の購読を申し込みます。

ご氏名
ご住所

ご存じですか? アルコール飲料の害

ストレスの大きい現代社会にあって、アルコールは緊張をほぐす身近な飲み物、また、人間関係の潤滑油であると考えられる人も多くいます。しかし、それは習慣的になり、制御と判断を支配する脳の働きをそこない、アルコール依存症などの健康的、精神的、社会的な害を私たちに及ぼします。この問題でお悩みの方は、ぜひお近くの救世軍か、下記の支援施設にお問い合わせください。



アルコール依存症者支援施設

- **自省館 (救護施設)** TEL 042-493-5374
生活の場を提供し、回復のために、個別支援計画に基づく生活及び自立支援をおこなっています。
- **男子社会奉仕センター** TEL 03-5860-2992
バザー場での作業を通して、身体的・精神的回復を図り、社会復帰できるよう訓練しています。

救世軍バザー場

新中古衣料、雑貨、家電製品、書籍、家具など品数豊富
東京都杉並区和田 2-21-2 TEL 03-5860-2992
交通: 東京メトロ丸の内線 中野富士見町下車徒歩 10 分
オープン 毎週土曜日 9 時~14 時

救世軍バザー場 江東出張所

新中古衣料、雑貨など掘り出し物多数
東京都墨田区太平 4-11-3 TEL 03-3626-0738
交通: J.R.、東京メトロ半蔵門線 錦糸町下車徒歩 10 分
オープン 毎週土曜日 10 時~15 時

◆寄贈品受付、お問合せは TEL: 03-5860-2992 まで

救世軍とは
The Salvation Army

世界百二十六の国と地域で活動するプロテスタントのキリスト教会です。
一八六五年、イギリスで始められ、家のない人々、貧しい人々、仕事につけない人々、アルコールに溺れる人々、搾取される女性たち、顧みられない子どもたち、災害に遭った人々……などに助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。
日本での働きは、一八九五年に始まりました。伝道の拠点である小隊(教会にあたる)を開設し、廃娼運動を積極的におこない、失業者対策、児童養護や女性保護、結核療養所の設立、アルコール依存症者回復支援など、時代にさきがけて人々の必要に応える様々な社会福祉、医療の働きを興してきました。
これらの働きの中でも、アルコール依存症者の回復支援は、救世軍がその草創

期から取り組んできたものです。酒のために自分の人生ばかりか家族の生活をも狂わせてしまう、この病気のからの脱出の道を提供する団体として、信徒たちも率先してアルコール抜きのライフスタイルをとっています。
日本では、『ときのことえ』や『禁酒のすすめ』(山室軍平著)、講演会などで酒の害を説いてきました。現在も、アルコール依存症者回復支援施設で、断酒と個別支援計画に基づく自立支援の働きをおこなっています。また、毎年、酒害強調週間を設けて、啓発に努めています。
今年 **四月七~十三日** が **酒害強調週間** です



日用品配布ボランティア募集

4月から11月まで毎月1回、月曜日、東京・大手町の常盤橋公園でおこないます。

詳しくは、救世軍本営 社会福祉部 TEL 03-3237-0865 までお問い合わせください。



〈日本〉●災害対応チャプレン養成研修会始まる

2月5日~7日、東日本大震災救援キリスト者連絡会主催で、日本福音同盟援助協力委員会、クラッシュジャパン、救世軍の3団体の協賛でおこなわれました。講師には、アメリカの救世軍より、災害支援コーディネーターのケビン・エラズ氏を招き、25 教団 (単立含む)、51 人が参加しました。学びは、テキスト『災害時の心のケア・スピリチュアルケア』(ケビン・エラズ著) より、国際的標準のプログラムにそって体系的になされました。これから先、被災地に住む方々への心のケアの面をどのようにしていくのか、具体的なネットワーク作りも含め、良い学びの機会となりました。

●厚生労働大臣より感謝状贈呈についての発表

3月11日、東日本大震災における被災者の支援活動等に貢献した全国1,458 団体等が、厚生労働大臣より感謝状を贈呈されることとなり、宮城県庁からの推薦により「宗教法人 救世軍」にも授与されるとの発表がありました (全国で宗教法人は2 団体のみ)。贈呈式は宮城県庁でおこなわれる予定です。活動を支えてくださっている皆様に感謝しつつ、今後も支援活動を続けていきます。



世界をみつめて

〈フィリピン〉台風被災者支援一続報

昨年の12月、フィリピン (特にミンダナオ島) を襲った台風はレベル5 という、過去に経験したことのない大型のものでした。ミンダナオ島バガンガの町の被災者は1,820 人にのぼり、今年の1月には、SAWSO (救世軍ワールド・サービス・オフィス) からの資金で、バケツやひしゃく、毛布、寝具に加え、米、麺類、コンビーフやイワシの缶詰などの食料パックが届けられました。

台風は、多くの住民にとって大切な生活の手段であるココナツの木々をなぎ倒しており、復興への道筋に更なる援助が必要となっています。香港・マカオの救世軍は、これから数カ月分の支援活動に必要な資金を香港の行政機関より受け取っています。しかし、復興がなるまで、なお多くの月日を要するため、引き続き多くの方々からの献金を必要としています。



発行所 救世軍本営
〒101-0051 東京都千代田区 神田神保町二丁目十七番一
電話 東京 (03) 3337-0881
印刷所 救世軍本営
〒101-0051 東京都千代田区 神田神保町二丁目十七番一

発行日及び定価
発行日 毎月一日・十五日
定価 毎月 一冊 500円 (税込) / 一冊 550円 (税込)
一冊 500円 (税込) / 一冊 550円 (税込)
クリスマス特集号 (十二月一日号) 一冊 1,000円 (税込) / 一冊 1,100円 (税込)
一年分 (二七〇円十送料七二八円) 振替 〇〇一八〇五四四〇〇

編集人 齋藤 恵子
印刷兼 代表者 勝地 次郎
印刷所 救世軍本営

(取扱支部)
救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、右救世軍にご相談ください。